25-R1

外国人留学生選抜（第１期）

小　論　文

1．指示があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。

2．解答用紙の所定欄に受験番号（右詰め）・氏名・フリガナを記入しなさい。

3．この問題冊子の不ぞろい等に気づいた場合は、手を挙げて監督者に申し出なさい。

4．解答時間は60分です。

5．試験終了まで、受験者の退出は認めません。

25-R1

試 験 問 題

問題　次の文章を読み、後の各問に答えなさい。

温暖化対策として、あなたは、なにかしているだろうか。レジ袋削減のために、エコバッグを買った？　ペットボトル入り飲料を買わないようにマイボトルを持ち歩いている？　車をハイブリッドカーにした？

はっきり言おう。その善意だけなら無意味に終わる。それどころか、その善意は有害でさえある。

なぜだろうか。温暖化対策をしていると思い込むことで、真に必要とされているもっと大胆なアクションを起こさなくなってしまうからだ。良心の呵責から逃れ、現実の危機から目を背けることを許す「免罪符」として機能する消費行動は、(1)資本の側のグリーン・ウォッシュにいとも簡単に取り込まれてしまう。

では、国連が掲げ、各国政府も大企業も推進する「SDGs（持続可能な開発目標）」なら地球全体の環境を変えていくことができるだろうか。いや、それもやはりうまくいかない。政府や企業がSDGsの行動指針をいくつかなぞったところで、気候変動は止められないのだ。SDGsはアリバイ作りのようなものであり、目下の危機から目を背けさせる効果しかない。

かつて、マルクスは、資本主義の辛い現実が引き起こす苦悩を(ア)和らげる「宗教」を「大衆のアヘン」だと批判した。SDGsはまさに現代版「大衆のアヘン」である。アヘンに逃げ込むことなく、直視しなくてはならない現実は、私たち人間が地球のあり方を取り返しのつかないほど大きく変えてしまっているということだ。

人類の経済活動が地球に与えた影響があまりに大きいため、ノーベル化学賞受賞者のパウル・クルッツェンは、地質学的に見て、地球は新たな年代に突入したと言い、それを「人新世」(Anthropocene）と名付けた。人間たちの活動の痕跡が、地球の表面を覆いつくした年代という意味である。

実際、ビル、工場、道路、農地、ダムなどが地表を埋め尽くし、海洋にはマイクロ・プラスチックが大量に浮遊している。人工物が地球を大きく変えているのだ。とりわけそのなかでも、人類の活動によって飛躍的に増大しているのが、大気中の二酸化炭素である。

ご存じのとおり、二酸化炭素は温室効果ガスのひとつだ。温室効果ガスが地表から放射された熱を吸収し、大気は暖まっていく。その温室効果のおかげで、地球は、人間が暮らしていける気温に保たれてきた。

ところが、産業革命以降、人間は石炭や石油などの化石燃料を大量に使用し、膨大な二酸化炭素を排出するようになった。産業革命以前には280ppmであった大気中の二酸化炭素濃度が、ついに2016年には、南極でも400ppmを超えてしまった。これは400万年ぶりのことだという。そして、その値は、今この瞬間も増え続けている。

2018年にノーベル経済学賞を受賞したイエール大学のウィリアム・ノードハウスの専門分野は、気候変動の経済学である。そんな人物がノーベル賞を受賞したのは、気候危機に直面する現代社会にとって素晴らしいことだと思われるかもしれない。だが、一部の環境運動家たちからは、授賞の決定に対して、厳しい批判の声が上がったのだ。どうしてだろうか。

【A】　批判の俎上にのせられたのは、ノードハウスが1991年に発表した論文であった。この論文は、ノーベル経済学賞をもたらした一連の研究の(イ)タンショになったものである。

【B】　1991年といえば、折しも冷戦終結直後であり、グローバル化が二酸化炭素排出量を激増させる前夜だった。ノードハウスはいち早く、気候変動の問題を経済学に取り込んだ。そして、経済学者らしく、炭素税を導入することを提唱し、最適な二酸化炭素削減率を決めるためのモデルを構築しようとしたのである。

【C】　だが、問題はそこで引き出された最適解だ。あまりにも高い削減目標を設定すれば、経済成長を阻害してしまう、だから、重要なのは「バランス」だ、と彼は言う。ところが、ノードハウスが設定した「バランス」は、経済成長の側にあまりにも傾きすぎていたのだ。

【D】　ノードハウスによれば、私たちは、気候変動を心配しすぎるよりも今のままの経済成長を続けた方が良い。

経済成長によって、世界は豊かになり、豊かさは新しい技術を生む。だから、経済成長を続けた方が、将来世代はより高度な技術を用いて、気候変動に対処できるようになる。経済成長と新技術があれば、現在と同じ水準の自然環境を将来世代のために残しておく必要はない、と彼は主張したのである。

【E】 ちなみに、2016年に発効したパリ協定が目指しているのは2100年までの気温上昇を産業革命以前と比較して、2℃未満（可能であれば、1.5℃未満）に抑え込むことである。

【F】 だが、いまや、その2℃目標でさえ非常に危険であると多くの科学者たちが警鐘を鳴らしている。それなのに、ノードハウスのモデルでは、3.5℃も上昇してしまうのである。

もちろん、3.5℃もの気温上昇が起きれば、アフリカやアジアの途上国を中心に壊滅的な被害が及ぶことになる。だが、世界全体のGDP（国内総生産）に対する彼らの寄与は小さい。むろん、農業も深刻なダメージを受けるだろう。しかし、農業が世界のGDPに占める割合は、「わずか」４％である。わずか４％ならば、いいではないか。アフリカやアジアの人々に被害が及ぼうとも――。こうした発想がノーベル経済学賞を受賞した研究の内実である。

ノーベル賞を取るほどであるから、当然、環境経済学におけるノードハウスの影響力はとてつもなく大きい。環境経済学が強調するのは、自然の限界であり、資源の希少性だ。希少性や限界のもとで最適な配分を計算するのは、経済学の得意分野である。そして、そこから出てくる最適解は、自然にも、社会にとっても「ウィンウィン」の解決策ということになる。

だから、ノードハウスの解決策は、受け入れられやすい。国際機関などで、経済学者たちが自らの存在感を示すための戦略としては、間違いなく有効である。だが、その代償として、ほとんどなにもしないのに等しい、ノロノロとした気候変動対策が正当化されてしまう。

もちろん、ノードハウス型の思考は、パリ協定にも影響を与えている。先ほど、パリ協定は気温上昇を２℃未満に抑えることを目指していると言った。だが、それは口先の約束にすぎない。実際には各国がパリ協定を守ったとしても、気温は3.3℃上昇するという指摘もある。ノードハウスのモデルの示す数字との近さを見てほしい。やはり、各国の政府も経済成長を最優先にして問題を先送りにしているのだ。

だから、SDGsのような対策がメディアでも盛んに取り上げられるようになっている裏で、世界の二酸化炭素排出量が毎年増え続けているのは不思議ではない。(2)問題の本質はうやむやにされ、「人新世」の気候危機は深まっていく。

［斎藤幸平『人新世の「資本論」』（集英社、2020年）、出題のため原文を一部改変］

問１ 下線部(ア)の漢字の読みを平仮名で記し、下線部(イ)の片仮名を漢字に改めなさい。（楷書で丁寧に書くこと）

問２ 下線部(1)「資本の側のグリーン・ウォッシュ」とありますが、筆者が考えるその意味として最も適当な説明を本文中から30字以内で抜き出し、解答欄の文章を完成させなさい。（句読点・記号等は字数に含む）

問３ 本文からは次の段落が抜け落ちています。これを補う場合、本文中の【A】～【F】のどの段落の後に挿入するのが最も適当ですか。そのアルファベットを一つ選んで答えなさい。

> ところが、彼の提唱した二酸化炭素削減率では、地球の平均気温は、2100年までになんと3.5℃も上がってしまう。これは、実質的になにも気候変動対策をしないことが、経済学にとっての最適解だということを意味している。

問4　下線部(2)「問題の本質はうやむやにされ」とありますが、筆者の考える「問題の本質」を説明した次の文の空欄 X と空欄 Y に入る、最も適当な言葉を本文中よりそれぞれ4字で抜き出して記しなさい。

X が Y の根本的な原因であるということ。

問5　本文に関し、地球温暖化に対する解決策について、あなた自身の意見を500字以内で述べなさい。

問題はここまでです